vol.522

mj "高品質力、信頼品質、信頼はマック"
THE MAC JOURNAL
三菱商事アグリサービス株式会社

◆ 2018年5月16日発行ラインナップ
・山菜や野菜に似た有毒植物にご用心
・「北海道」命名150年

山菜や野菜に似た有毒植物にご用心

5月になり全国で新緑が映え、野山でも山菜狩りを楽しむことが出来る季節となった。最近では熊の被害に見舞われる事件も多いが、この旬の時期にちらほらと耳にするのが有毒植物の誤食による中毒や死亡事故だ。今年も不幸なことに4月22日に北海道岩見沢市においてギョウジャニンニクと間違えてイヌサフラン（コルチカム）を誤食してしまい、死亡事故があったばかりだ。農水省消費安全局や厚労省では野菜・山菜とそれに似た有毒植物の特徴をまとめたリーフレットを作成している。積極的に印刷し利用を呼び掛けているので本紙でも紹介したい。

知らない野草、山菜は採らない、食べないのが基本だ。リーフレットに紹介されている植物は良く似ているものがあるのだが、これを誤食してしまうと食中毒に陥る被害事例が実際に発生しており注意が必要だ。厚生労働省のホームページ上で過去10年間における有毒植物による食中毒発生状況が報告されている。18植物（不明は除く）で事件数は188件、患者数は818名、死亡数は10名となっている。有毒植物の誤食による事件数が一番多いのはニラ・ノビル・タマネギと思い込んで誤食したスイセンとなっており47件（患者数は167名）。患者数で一番多いのはジャガイモ（親芋で発芽しなかったイモ、光に当たって皮が薄い黄緑～緑色になったイモの表面の部分、芽が出て来たイモの皮及び及び付け根を食べた例）で328名（事件数20件）となっている。また、死亡件数としてはスイセン（1名）、トリカブト（3名）、イヌサフラン（6名）となっている。幼い頃、親からジャガイモの芽には毒があるので芽が出たジャガイモは必ず取り除いて食べるよう教わった事を思い出すのだが、身近で料理に用いられやすい植物だけに患者数は多く注意されたい。また、テレビの見過ぎのせいなのか、サスペンスドラマでも良く用いられる例としてトリカブトは聞きなれた植物だ。ニリンソウやモミジガサとトリカブトが間違えやすいとの事で、食後10～20分以内で口唇、舌、手足のしびれや嘔吐、腹痛、下痢、不整脈、血圧低下、けいれん、呼吸不全に至ってしまい実際に死に至ったしまった例がある。

右：イヌサフラン　左：ギョウジャニンニク

さらに、厚生労働省の「自然毒のリスクプロファイル」で紹介されている植物の中にこれから注意したい植物として、梅雨の時期に必ず見かける紫陽花が掲載されている。紫陽花は青シソと似ているので間違えて代用してしまったのではないか、と想像してしまう。紫陽花に毒性があることに対して正直驚いたのだが、紫陽花の葉を刺身のつまに使ったところ、嘔吐等の食中毒の事例が紹介されている。事件数で一番多かったニラについては、スイセンを間違えて誤食してしまうようだ。スイセンとニラの見分け方は球根があるかないかで一目瞭然なのだが、地上部の可食部分だけ見ると間違えやすいので注意が必要だ。ホームページでは食用の野草と確実に判断出来ない植物は絶対に採らない！、

（次ページへ続く）

(前ページより続く)
食べない！、売らない！人にあげない！と注意喚起している。家庭菜園や畑などで野菜と鑑賞植物を一緒に栽培すること、山菜に混じって有毒植物が生えている例があるとして山菜狩りなどをする時は一本、一本よく確認して採り、調理前にもう一度確認することを勧めている。野草を食べて体調が悪くなったら、直ぐに医師の診察を受ける事、見分けに迷ったら最寄りの保健所に相談するよう説明されている。

農水省HP　知らない野草　山菜は採らない　食べない！
http://www.maff.go.jp/j/syouan/nouan/rinsanbutsu/natural_toxins.html
厚生労働省HP　有毒植物に注意しましょう
http://www.mhlw.go.jp/stf/seisakunitsuite/bunya/kenkou_iryou/shokuhin/yuudoku/index.html
自然毒のリスクプロファイル
http://www.mhlw.go.jp/stf/seisakunitsuite/bunya/kenkou_iryou/shokuhin/syokuchu/poison/index.html

---

「北海道」　命名150年

2018年（平成30年）は、「北海道」と命名されてから150年目の節目を迎える。記念セレモニーも8月5日に開催予定となっており、徐々に盛り上がりを見せている。当社札幌支店の近くには、重要文化財の北海道庁旧本庁舎があり「赤れんが」の愛称で親しまれている（写真参照）。施設内は見学自由で、北海道立文書館・博物館・樺太関係資料館・北方領土館など、歴史に関する文書や記録が展示されている。赤れんがは、明治21年（1888年）完成の建物であり、当時国内有数の大建造物でした。建物の頂きにそびえる八角塔は米人開拓使顧問ケプロンの計画で、当時アメリカでは独立と進取のシンボルとして、ドームを乗せる建築様式が流行していた。明治政府の北海道開拓にかける意気込みを示しているといえる。その建物の横に、開拓使札幌本庁舎跡地がある。明治時代に政府が、北方開拓のために「開拓使」を設置し、2代目の東久世長官時代に建設が始まった。その際、部下の判官も多く同行し、その内の一人、北海道では「開拓の父」と慕われる島義勇（しまよしたけ）が札幌本府の建設と、札幌の街づくりを進めた。開拓使判官として札幌の街づくりに壮大な計画を練り、溢れる情熱を持って実行に着手されたという。現在の南1条通りを創成川に直交させ札幌の基点と定めた。しかし、街づくりは莫大な費用が必要であり、政府と対立し志半ばにして札幌を去ることとなったが、その後札幌の街づくりの基礎を築いた島義勇の構想は随所に継承されており功績が残っている。

また、開拓使の役人として1869年に、松浦武四郎が蝦夷地に代わる名称の提案を明治政府へ行った。「北海道の名付け親」と言われている松浦武四郎は、蝦夷地を探査し多くの報告書や地図を纏めた探検家で、江戸幕府から評価されていた。江戸から明治に時代は変わり蝦夷地に詳しい第一人者として明治政府の一員となった人物である。最終的に「北加伊道」の「加伊」が「海」となって、同年8月15日に現在の「北海道」と命名されました。「カイ」という言葉には、「この地で生まれたもの」という意味があるとアイヌの長老から教えられたと記しており、「北加伊道」にその意味を込めたと言われている。札幌は今や人口200万に迫る大都市に成長し、魅力あふれる都市となっている。150年目の節目に、もっと北海道のことを知りたいと思う。（札幌支店）

5月に入り、暑い日もあれば肌寒い日もありますね。体調管理には十分ご注意ください。

編集事務局：南部、助川
電話：03-5275-5511/E-mail： macjournal@mcagri.co.jp　URL http://www.mcagri.jp